

久保 榮全集

5

久保栄全集

第5卷 評論

編集	宇野重吉	■久野収
	武谷三男	■野間宏
	羽仁五郎	■
解説	菅井幸雄	■祖父江昭二
解題	内山鵜	

三一書房

一九六二年十月五日 第一版発行

久保 栄全集 第五卷 定価一、四〇〇円

© 久保 マサ

一九六二年

検印
廃止

発行者 田 畑 弘

発行所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 東京 〇五八一一五番
振替 東京 八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社
製本所 橋本製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

久保栄全集

第五卷

第五卷

一九二六年

「ホオゼ」序……………一三

翻訳者の観た「ホオゼ」……………一六

表現派の喜劇作家カアル・シュテルンハイム……………一九

「ユウディット（ユダヤの寡婦）」序……………二三

聖書——「ユウディット」——「ユダヤの寡婦」……………二六

「解放されたウオタン」序言……………三三

ドイツ劇場の一九二六年……………三六

——本年度の上演作品から——……………三七

ゲオルク・カイザアの閱歴……………四六

一九二七年……………四七

「平行」の批評にたいして……………五三

——秦豊吉氏に——……………五五

シュテルンハイムについて……………五九

ハンス・ザックスについて……………六二

シュテルンハイムの横顔	五
表現主義の戦争劇とゲーリンク	七
一九二八年	
演劇と映画の接点	八
「築地小劇場」編集を完えて	九
イブセン百年祭講演	九
「メツザレム」巻末に	一〇
謝肉祭狂言とハンス・ザックス	一二
「ウィルヘルム・テル」について	一五
創作劇場と翻訳劇場	一九
帝劇公演と「ウィルヘルム・テル」	二三
六号活字で	二〇
世相劇への道	二三
——「二人のオリイフェル」その他——	
「組織委員提出テーゼ集録」から	四一
「築地小劇場」編集余語	四三
「真夏の夜の夢」とその音楽	四五
「築地小劇場」編集後記	五〇
ハイエルマンス断片	五一

オランダの代表作家ハイエルマンズ……………一五
鄭芝竜と鄭成功……………一七

——「国性爺合戦」の史実——

「国性爺合戦」の改作……………一五
「たのむ」小惑……………一七
「当世立志伝」のテキスト・レジイ……………一八

一九二九年

ドイツの「仮名手本忠臣蔵」……………一七
「広い国」後記……………一八
恋愛とテニスと登山の芝居……………一九

——「広い国」について——

残された計画……………一八
追憶断章……………一九
小山内薫先生劇場葬公文……………二〇
熱情の人……………二〇
数字的な演劇史……………二一
「新築地劇団」創立宣言書……………二二
築地小劇場の分裂に関して……………二三
「日の出前」「織工」「鰻の外套」……………二四

ドイツ劇壇近事……………	二〇八
ハウプトマンの方向……………	二一一
「劇場街」同人として……………	二一九
「新築地」を中心に……………	二三一
旧観客層から新観客層へ……………	二三五
昭和四年上半期の印象に残った芸術その他（アンケート）……………	二三三
「母」についての対話……………	二三三
「全線」を観る……………	二三七
「劇場街」編集部より……………	二四三
劇場ABC（翻訳）……………	二四六
——ヘルベルト・イエリングとエルウィン・ビスカトオルのラジオ座談——……………	二五九
ドイツのエレオノラ・デュウゼ劇……………	二六一
「劇場街」（十月号）編集後記……………	二六一
明治以後の演劇史と土方与志……………	二六三
カット以前の高田保……………	二六〇
八田元夫は忘れられかけた……………	二六三
村山知義の今と昔……………	二六四
「劇場街」（十一月号）編集後記……………	二六六

「劇場文化」発刊の辞	二六九
大衆座にたいする希望	二九一
カイゼルの生活経路	二九五
カイザアの歴史劇	二九七
「新説国姓爺合戦」について	三〇三
「新説国姓爺合戦」梗概	三〇五
歌舞伎劇壇の新旧対立	三〇七
大衆座の旗挙げ	三二三
「密偵」と左翼派新内	三三一
メイエルホリドとドイツ・プロレタリア演劇	三三六
ドイツの反戦劇	三三三
ドイツ・プロレタリア演劇概観	三四〇
演劇雑誌の編集	三五三
——その種類と職能とについて——	
ビッグ・メモ（アンケート）	三七二
一九三一年	
歴史劇の問題	三七三
「青酸カリ」資料	三八〇
捕われたピスカートル	三八六

プロレタリア演劇運動の国際的提携……………三九

—— I A T B (国際労働者演劇同盟) の設立を中心に ——

ピスカトール「政治的演劇」……………四〇九

資本主義諸国における労働者演劇の昂揚……………四一八

左翼劇場の「生きた新聞」……………四四五

一九三二年

労働者演劇同盟第一回拡大プレナム会議議事録 (翻訳) ……四五一

「パン」を見る人々のために……………五一

キルションに迫いつけ！……………五〇九

ソヴェート農民劇……………五二三

プロレタリア演技の発展のために……………五二九

—— 「パン」にあらわれたわれわれの実践をとおして ——

「風の街」を見る人々のために……………五四〇

戯曲「逆立つレール」にたいする支部レバ委の批判……………五四六

一九三三年

演劇創造の三体系……………五一

「恐怖」の論争について……………五六一

—— 問題の整理と解決のために ——

解題		五九
(内山 鶉)		
解説		六三
(菅井幸雄・祖父江昭二)		

評

論

(一九二六——一九三三)

一九二六年

「ホオゼ」序

表現派がはじめて世界文学の舞台に登場した時には、喜劇の女神タリアに扮していた。カアル・シユテルンハイムの「ブルジョアの英雄生活から」と、ゲオルク・カイザアの「肉慾喜劇」とは、最もよく表現派初期の作風を代表するものである。

シユテルンハイムの血管には、ユダヤの血が流れているらしい。彼はこの秘密を隠蔽しようとするためか、自分の家族についても、過去の半生についても、ほとんど口を開いたことがない。ただ、一八七八年の四月一日にライプツヒで生れたこと、かつて認識論を学んだこと、オランダ、ベルギーを渡り歩いたこと、今はスイスのウットウィルに住んでいることなどが、ある機会に一片の書簡のなかに誌されたばかりである。

彼の作品の大部分を占めるものは、作者みずから「ブルジョアの英雄生活から」„Aus dem bürger-

lichen Heldenleben”と命名した、一連の喜劇である。そうして、僕によって日本語に移植される不幸な運命を見た「腰巻」^{ホサキ}、Die Hose“は、この喜劇集の第一作品である。これに続いて、「匣」^{ハコ}、Die Kasette“「ブルジョア・シャヴェル」^{ブルジョア・シャヴェル}、Bürger Schippel“「成上り者」^{ナゲリモノ}、Der Snob“「ブルレバレン」^{ブルレバレン}、Perleberg“「一九一三年」、1913“候補者”^{候補者}、Der Kandidat“などの諸作がしきりと文芸市場を賑わしたのである。一九一三年には、これらの喜劇の数は七篇であった。一九二〇年には、十二篇の多きに達している。シュテルンハイムは、これまでの時代の文学者が長く捨てて顧みなかったプティ・ブルジョアの社会に、彼の「好奇心に満ちた眼光の探照燈」^{シヤインフルフエッセル}を注ぎかけたのである。そうして、この凡庸、卑俗、無為の世界の中に、新しいヒーローの幾人かを見出したのである。これらの人物は、世間的な偶発的な障害を躍り越えて、「自己の性格の個人的自由」に向って「独自の比類のない生存様式」に向って慕進する勇士である。彼らの英雄行為を讃美——嘲笑したのが、「ブルジョアの英雄生活から」である。「腰巻」^{ホサキ}は、この喜劇集の最初の作品であるばかりでなく、また最も代表的なものとすることができる。作者自身も、この後をうけて書いた数篇の喜劇は、本質的の意味においては何らの新しさをもこの第一作品に付け加えるものではないと言っている。

この作の発表された一九〇八年という年は、ちょうどゲルハルト・ハウプトマンの自然主義に食傷したドイツの劇壇が、双手を挙げて新浪漫派を舞台に迎え入れた時代に属している。シュテルンハイムの言葉を借りれば、当時の劇場は、「伝説に棲むお年寄りの王様や若いお妃や、さては噂の高いお小姓などが、さまざまな装いを凝らして登場する仮面舞踏会」にはかならなかつたのである。「豊かに衣裳を着飾って、現実には遠い珠玉のような台辞を連ねたり、崇高な所作を演じたり」しなければ、観客が承知しなかつた時代である。こういう世界へ、プティ・ブルジョアの細君が往來のまん真ん中